11/26 Sat.

第252回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 252 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

11/27 Sun.

第252回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 252 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
トマーシュ・ネトピル *–p.4*
TOMÁŠ NETOPIL

ヴァイオリン
Violin
岡本誠司 *–p.5*
SEIJI OKAMOTO

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster
日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

マルティヌー（ヴォストルシャーク編）
MARTINŮ (arr. VOSTŘÁK)
歌劇〈ジュリエッタ〉組曲 ［約17分］ *–p.7*
"Julietta" Suite
I. Poco andante
II. Vivo
III. Lento

モーツァルト
MOZART
ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K. 219 **〈トルコ風〉** ［約31分］ *–p.8*
Violin Concerto No. 5 in A major, K. 219 "Turkish"
I. Allegro aperto
II. Adagio
III. Rondeau: Tempo di menuetto

［休憩］
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK
交響曲 第9番 ホ短調 作品95 **〈新世界から〉** ［約40分］ *–p.9*
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

12/2 Fri.

第657回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 657 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
トマーシュ・ネトピル *–p.4*
TOMÁŠ NETOPIL

ヴァイオリン
Violin
ヴィクトリア・ムローヴァ *–p.5*
VIKTORIA MULLOVA

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster
日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH
ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77 ［約39分］ *–p.10*
Violin Concerto No. 1 in A minor, op. 77
I. Nocturne
II. Scherzo
III. Passacaglia
IV. Burlesque

［休憩］
[Intermission]

モーツァルト
MOZART
交響曲 第25番 ト短調 K. 183 ［約24分］ *–p.11*
Symphony No. 25 in G minor, K. 183
I. Allegro con brio
II. Andante
III. Menuetto
IV. Allegro

ヤナーチェク
JANÁČEK
狂詩曲〈タラス・ブーリバ〉 ［約23分］ *–p.12*
Rhapsody "Taras Bulba"
I. Death of Andrei (Smrt Andrijova)
II. Death of Ostap (Smrt Ostapova)
III. Death and Prophecy of Taras Bulba (Proroctví a smrt Tarase Bulby)

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

11/26 土曜マチネー
11/27 日曜マチネー
12/2 名曲
Maestro

指揮
トマーシュ・ネトピル
TOMÁŠ NETOPIL, Conductor

チェコの俊英が母国の音楽に熱い思いを込める

©Pavel Petrus

シンフォニーとオペラの両方で国際的に活躍するチェコの俊英ネトピルが、お国もののドヴォルザーク〈新世界〉やヤナーチェク〈タラス・ブーリバ〉を披露する。

ストックホルム王立音楽院でヨルマ・パヌラに指揮を学び、2002年の第1回ショルティ国際指揮コンクールに優勝して話題を呼んだ。プラハ国民劇場、エステート劇場の音楽監督などを歴任し、現在はドイツの名門エッセン歌劇場とエッセン・フィルの音楽総監督、チェコ・フィルの首席客演指揮者を務めている。これまでに、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ウィーン響、ドレスデン国立歌劇場管、パリ管、フランス国立管、ロンドン・フィル、フィルハーモニア管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、チューリヒ・トーンハレ管などに客演。オペラではウィーン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、バイエルン国立歌劇場、パリ国立オペラ、チューリヒ歌劇場、ザルツブルク音楽祭など活躍の場を広げている。2021/22年シーズンは、モンテカルロ・フィル、ブルノ国立フィル、プラハ放送響、RAI国立響、アスペン音楽祭への客演の他、ハノーファー国立歌劇場管へのデビューを果たした。

ヤナーチェク、マルティヌー作品などを得意とするほか、モーツァルト、ワーグナー、R. シュトラウス作品などでも高い評価を得ており、録音も多数。エッセン・フィルとのスーク作曲〈アスラエル交響曲〉は「曲を十分に理解し、ドラマティックでありながら、細部にいたるまで印象的だ」と絶賛された。読響には2019年以来、2度目の登場。

11/26 土曜マチネー
11/27 日曜マチネー
Artist

©Yuji Ueno

ヴァイオリン
岡本誠司
SEIJI OKAMOTO, Violin

楽曲の本質を真摯（しんし）に追い求める本格派ヴァイオリニスト。東京芸術大学を卒業後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学の修士課程修了。J. S. バッハ国際コンクール優勝、ヴィエニャフスキ国際コンクール第2位など受賞歴多数。2021年ミュンヘン国際コンクール第1位となり、大きな話題を呼んだ。現在はクロンベルク・アカデミーに在籍し、ベルリンを拠点に日本と欧州でソロ、室内楽など精力的に活動を展開している。ベルギー国立管、サンクトペテルブルク響、読響などと共演。ライプツィヒ・バッハ音楽祭、ムジカ・ムンディ音楽祭などの国際音楽祭にも出演。楽器はNPO法人イエロー・エンジェルからM. ゴフリラーの貸与を受け、㈱日本ヴァイオリンから名器貸与特別助成を受けている。

12/2 名曲
Artist

上品な深みのある美しい音、完璧な技術、深い知性を兼ね備えた現代最高峰のヴァイオリニスト。モスクワ音楽院で学ぶ。1980年シベリウス国際コンクール及び82年チャイコフスキー国際コンクールで優勝し注目を集め、83年の西側への亡命は大きな話題となった。これまでに、アバド、マゼール、メータ、ムーティ、ラトル、小澤征爾らの指揮で、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロンドン響、ボストン響など世界の一流楽団と共演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭など数々の音楽祭にも出演。バロック音楽から現代音楽まで幅広いレパートリーを誇る。CD録音では、フィリップスやオニックス・レーベルなどから数多くリリースしており、いずれも高い評価を得ている。

©heikefischer fotografie

ヴァイオリン
ヴィクトリア・ムローヴァ
VIKTORIA MULLOVA, Violin

マルティヌー（ヴォストルシャーク編）
歌劇〈ジュリエッタ〉組曲

ボフスラフ・マルティヌー（1890〜1959）はチェコで生まれ、戦間期パリのモダニズムに身を投じた後、戦火を避けてアメリカに渡った。戦後しばらくしてヨーロッパに戻り、スイスで没している。6曲の交響曲をはじめ膨大な作品を作曲し、オペラも少なくとも15作以上を残している。

パリ時代の作である歌劇〈ジュリエッタ〉は、シュルレアリスムの作家ジョルジュ・ヌヴーの戯曲『ジュリエット、または夢の鍵』をもとに作曲家自身が台本を書き、1936年から翌年にかけて作曲された。旅先で聴いた少女の声が忘れられない主人公ミシェルは、彼女の姿を求めてある港町にやってくる。その住人はみな過去のことをすぐに忘れてしまうので物事の因果関係を掴めず、そのうちにミシェル自身も現実と夢の境界が曖昧になっていく。ストーリーや意識の流れを豊かなオーケストレーションで彩った本作は、中期の傑作。読響常任指揮者のセバスティアン・ヴァイグレも近年フランクフルトで取り上げている。

本組曲は同郷チェコの作曲家ズビニエク・ヴォストルシャークが1969年に編曲したもので、原作のシンフォニックな魅力を3つの楽章へとまとめている。

第1曲　ポコ・アンダンテ　ファゴットの高音の旋律がオーケストラのざわめきを呼びだし、これから始まる幻想的な物語を予感させる。木管を中心に鄙（ひな）びた旋律が現れ、活気に満ちた総奏を経て冒頭の気分が戻ってくる。

第2曲　ヴィーヴォ　分厚く垂れこめた音の雲を抜けた先で、弦のコラール風の旋律に木管・チェレスタ・ピアノがきらびやかな合いの手を入れる。

第3曲　レント　緊迫感をもって始まるが、ヴァイオリンに明るい旋律が出て気分が変わりエクスタシーが波状に訪れる。突如、ヴィオラに冒頭のファゴットの旋律が現れるが、これは振り出しに戻ってしまうオペラの筋書きに呼応している。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1936〜37年／初演：1938年3月16日（歌劇全曲）、プラハ／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、銅鑼）、ピアノ、チェレスタ、ジュ・ドゥ・タンブル、弦五部

モーツァルト
ヴァイオリン協奏曲 第５番 イ長調 K.219〈トルコ風〉

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756〜91）は幼少期からピアノだけでなくヴァイオリン演奏にも天賦の才を示したが、ピアノ協奏曲が生涯にわたって書かれたのに対し、5曲のヴァイオリン協奏曲は全てが1775年の一年間のうちにザルツブルクで作曲されている。この時モーツァルトはまだ19歳だったが、パリやイタリアへの楽旅を経て各地の最新のスタイルを吸収しており、これらのコンチェルトには、単に技巧を誇示するだけでない、優雅で洒脱（しゃだつ）な独自性が見事に花開いている。

年も暮に押し迫った12月20日に完成した第5番は、なかでも明快な旋律、コントラストの強調などのギャラントな特徴を消化した上で、各所に新機軸を組み込んだ堂々とした構えを持ち、古今の名作の一つに数えられている。〈トルコ風〉の通称は、第3楽章のエキゾティックなパッセージから来ている。モーツァルトは〈トルコ行進曲〉や〈後宮からの誘拐〉のようにトルコを題材にした曲を他にも書いているが、実態はトルコ音楽の直接の引用ではなくハンガリーやオスマン・トルコに接していた地域の音楽やロマ（ジプシー）音楽であった。長きにわたってヨーロッパを脅かしてきたオスマン帝国も、モーツァルトの時代にはその力を失い、トルコ的なるものは異国趣味として消費されるようになっていたのである。

第1楽章　アレグロ・アペルト（開放的な）　弦が主要なテーマを出した後、アダージョへとテンポを落とし独奏ヴァイオリンがそよ風のように揺れる伴奏音型に乗って姿を現す。アレグロに戻ると、今度は最初の主題を対旋律において独奏が伸びやかな歌を展開する。

第2楽章　アダージョ　優雅で抒情的な旋律は陰影に富み、ロマン派をすら予感させる。

第3楽章　ロンドー、テンポ・ディ・メヌエット　典型的な3拍子の舞曲だが、途中で2拍子のアレグロとなり、ホルンの持続音に乗ってヴァイオリンが「トルコ風」というタイトルのゆえんとなったロマ音楽風の走句を奏する。〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1775年12月20日完成／初演：不明／演奏時間：約31分
楽器編成／オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク
交響曲 第９番 ホ短調 作品95〈新世界から〉

「新世界」とはアメリカのこと。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）にとって、アメリカははるか彼方の異国である。ジェット機が飛び交う現代とは異なり、19世紀末にヨーロッパからアメリカに渡るためには船による長旅が必要だった。この曲は、はるばるたどり着いた新世界から故郷に向けた一種の音の便りとでも言えるだろう。

ドヴォルザークがアメリカに渡ったのは、ニューヨークに設立されたナショナル音楽院の院長に就任するためだった。1891年、裕福な実業家の夫を持つジャネット・サーバーは、本格的な音楽院をアメリカに設立すべく、すでに国際的な名声を築いていたドヴォルザークに院長への就任を依頼した。当初、ドヴォルザークはこのオファーを断っていたが、サーバー夫人からの粘り強い説得と桁外れの高額報酬に心を動かされ、渡米を受諾する。ドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌や先住民の音楽から新たな刺激を受け、新世界で受けたインスピレーションと祖国への望郷の念を交響曲第9番〈新世界から〉へと結実させた。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・モルト　ゆったりとした序奏から、緊迫感みなぎる主部へと続く。勇ましく推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章　ラルゴ　イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題で広く親しまれている。

第3楽章　モルト・ヴィヴァーチェ　エネルギッシュな民俗舞曲風のスケルツォ。中間部はひなびた民謡風。

第4楽章　アレグロ・コン・フオーコ　あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのような開始部は、大の鉄道ファンだった作曲者ならでは。壮大なクライマックスを築くが、消え入るような最後の一音が余韻を残す。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

11/26 土曜マチネー
11/27 日曜マチネー
Program Notes

ショスタコーヴィチ
ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77

1948年1月、ソヴィエト連邦当局の監視の目は鋭く光っていた。文化統制担当アンドレイ・ジダーノフから指導を受けたドミートリ・ショスタコーヴィチ（1906〜75）は、いわゆるジダーノフ批判によって、形式主義的と批判されて全作品の演奏が禁止となり、モスクワ・レニングラード両音楽院の教授職を突然解かれた。前年に着手したヴァイオリン協奏曲第1番は完成したものの、発表は見送られ、その7年後の1955年に「念入りに準備した」オイストラフの独奏で初演された。

第1楽章「夜想曲」 モデラート　低音弦楽器の導入部に続き、独奏ヴァイオリンが暗い叙情を漂わせながら主題を奏でる。オーケストラは控えめで、モノローグ風に旋律を歌い上げる。

第2楽章「スケルツォ」 アレグロ　管楽器の軽快な主題に独奏ヴァイオリンが合いの手を入れて始まる。冒頭の4音は、作曲家の名前の音名象徴（DSCH：レミ♭ドシ）。中間部は、ユダヤ的なイントネーションをもったクレズマー風の（2拍子の単純な伴奏音型や付点のリズムが特徴的な）音楽となる。

第3楽章「パッサカリア」 アンダンテ　ショスタコーヴィチが「パッサカリア」（低音主題に基づく変奏曲）を用いるときは、誰かの死と関連する。ジダーノフ批判の直後、彼を擁護してきた有名俳優が暗殺される事件が起きた。作曲家は何も語らないが、その心情を察するには余りある。全体は、主題と8つの変奏に、長大なカデンツァが続く。そこでは第2楽章のクレズマー風のパッセージも現れ、そのまま切れ目なく終楽章に入る。

第4楽章「ブルレスク」 アレグロ・コン・ブリオ　ティンパニの力強いリズムに導かれ、シロフォンの乾いた音色を含むリズミカルな主題が提示される。独奏ヴァイオリンは、目まぐるしく変化する華やかな主題で疾走する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1947〜48年／初演：1955年10月29日、レニングラード／演奏時間：約39分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（シロフォン、タンブリン、銅鑼）、ハープ2、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

モーツァルト
交響曲 第25番 ト短調 K.183

1773年秋、モーツァルト（1756〜91）は、3回目のウィーン旅行からザルツブルクに戻るとすぐに、新しい交響曲に着手した。帰着からおよそ10日後の10月5日に完成した第25番は、モーツァルトの2曲しかない短調の交響曲のうちのひとつで、いずれもト短調であることから「小ト短調」とも呼ばれている。とりわけ映画『アマデウス』の冒頭場面で衝撃的に用いられた第1楽章は印象的である。その人間の感情を露わにするような音楽は、かつては当時のドイツ文学界で盛んだった精神運動「シュトゥルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）」がウィーンの音楽界でも流行し、ハイドンやヴァンハルらが書いた短調交響曲から影響を受けたと指摘されていた。しかし、近年の研究では、ウィーン宮廷でよく演奏された、皇帝ヨーゼフ2世お気に入りの作曲家ガスマンの短調の弦楽四重奏曲からの影響が注目されている。

また、楽器編成も、ホルン4本はこれまでになく、ファゴットを低音楽器から独立させた用法（第2楽章）も画期的である。いずれにせよ17歳のモーツァルトが書いた第25番は、半年後に作曲される第29番イ長調とともに、交響曲作曲家として新たな境地を開くことになった。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ　シンコペーションのリズムによる第1主題と軽やかで愛らしい第2主題（変ロ長調）が鮮やかな対比を作り出す。

第2楽章 アンダンテ　ヴァイオリンと2本のファゴットが対話する優雅な主題で始まる。

第3楽章 メヌエット　強弱を強調したト短調のメヌエット。中間部（トリオ）は、管楽器のみによるト長調の明るい響きで、オーストリア的な雰囲気が漂う。

第4楽章 アレグロ　ユニゾンで始まる鋭い第1主題、滑らかに進む第2主題が示される。第1楽章で多用されたシンコペーションや32分音符のリズムが現れ、交響曲全体の統一感をもたらしている。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1773年10月5日完成／初演：不明／演奏時間：約24分
楽器編成／オーボエ2、ファゴット2、ホルン4、弦五部

ヤナーチェク
狂詩曲〈タラス・ブーリバ〉

チェコの作曲家レオシュ・ヤナーチェク（1854〜1928）の狂詩曲〈タラス・ブーリバ〉は、19世紀ロシア文学の名作、ニコライ・ゴーゴリ（1809〜52）の同名の小説に着想を得て書かれた。物語は、ポーランド・リトアニア共和国時代（1569〜1795）のウクライナを舞台に、ポーランドの支配に反旗を翻したコサック隊長ブーリバと2人の息子たちの戦いと死を描いたものである。自筆譜によると、ヤナーチェクは、1915年1月22日に作曲を開始、同年7月2日にひとまず書き上げた。その後、全体を縮小、オーケストレーションの変更など大幅に手を入れる。この改訂の際にイングリッシュ・ホルン（第1曲冒頭の音色は印象的）が新たに楽器編成に加わり、第3曲終結部にオルガンパートを書き足すなどして、18年3月29日に完成した。

第1曲「アンドレイの死」　モデラート、クワジ・レチタティーヴォ　次男アンドレイは、ポーランド人総督の娘と恋に落ちて仲間を裏切り、父親に射殺される。静かな開始の序奏はオルガンと鐘の音が響き、前半部（アダージョ）はオーボエ、クラリネットの美しいソロに導かれる。後半部（アレグロ）は激しい戦闘の音楽。

第2曲「オスタップの死」　モデラート　長男オスタップはポーランド軍に捕らえられ、殺害される。波打つハープにのせて鋭い歩みが反復する。緩急の部分が交替する歪（いびつ）な行進曲で、最後のマズルカ風の荒れた旋律がポーランド軍の勝利を、小クラリネットは断末魔の叫びを描く。

第3曲「予言、タラス・ブーリバの死」　コン・モート　ブーリバも捕らえられ、火刑台の上でロシアの輝かしい未来を予言する。6連符音型の反復を背景に切迫したモティーフが繰り返される。ノスタルジックな愛の主題や軽快な舞曲風の音楽が現れ、大規模な終結部は、新たに民謡風の旋律も登場し、壮大な音楽となる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1915〜18年／初演：1921年10月9日、ブルノ／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、チューブラーベル）、ハープ、オルガン、弦五部